大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『源氏物語』はなぜ帝妃の密通を書くことができたか

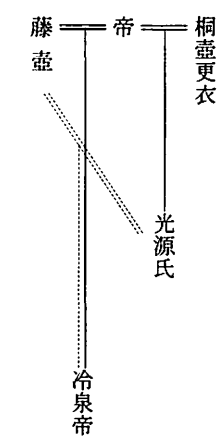
メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今西, 祐一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005067

『源氏物語』はなぜ帝妃の密通を書くことができたか

今西祐一郎

一

ご承知のように、『源氏物語』のストーリーは、左のような人間関係が土台になっています。実線は社会公認の関係、破線は社会には認知されていない秘密の関係です。



後に冷泉院と呼ばれる帝の王子が、じつはそうではなくて、同じ帝の王子（兄光源氏）と帝の後添え藤壺とのあいだに生まれた子であったという、驚くべき内容です。それだけではありません。その、いわば不義の子が、やがて即位するのです。

このような内容は、万世一系の天皇を神聖にして犯すべからざる神と崇め、皇位継承について、たとえば、

皇統は一系にして分つべからず。天皇直系の子孫在す限りは、子孫皇位を承けたまふことを古来の正法とす。（中略）皇位を承けたまふべき皇胤は、直近の天皇の直系の子孫たるべきことを正則と為す。

（『帝室制度史』第三巻第二款「皇位の一系」）

と定めてきた戦前の皇室観、天皇観からは、およそ許すことの出来ないストーリーです。

はたして、昭和十年代に、小学校の国語読本に『源氏物語』の若紫巻、光源氏の北山行きの場面が採られ、小学生向けですから原文ではなくてその口語訳が載ったのですが、それに対し

『源氏物語』はなぜ帝妃の密通を書くことができたか

て、次のような理由から、激しい批判が展開されました。

源氏物語の情的葛藤中、最も重要な枢軸をなす藤壺中宮対源氏の君の関係、これより起こつた第三帝（桐壺の巻に出で給ふ帝を第一帝として数え申す）御即位の事、源氏の君が太上天皇に准ぜられる事、これらは大不敬の構想である。源氏の君の須磨引退の原因となった第二帝の寵姫朧月夜内侍との関係も亦然り。源氏物語は全篇一貫して、その性格が淫靡であり不健全である。平安貴族衰亡の素因を露呈した文学である。

（橘純一「小学国語読本第十一「源氏物語」について文部省の自省を懇請する」）

今日の『源氏物語』の人気から考えると、信じられないような光景ですが、しかし、帝国憲法下の皇室観からすれば、それほど奇矯な発言ではなかった、ともいえます。

それよりも問題なのは、このようなストーリーが千年前の宮廷で作られ、そしてもてはやされた、ということの方ではないでしょうか。千年前の宮廷では、天皇の子でない者が天皇の位につくというような話が、何の抵抗もなく受け入れられたのでしょうか。

二

『源氏物語』は、『紫式部日記』からもわかるように、宮廷社会に流布したその初めから、人気を博していたようです。そして、時代とともにそれがだんだん読みにくくなってくると、早くも平安時代の末には注釈のようなことが始まります。中世になると「源氏学」として、公卿はもとより上級武士の教養としても重きをなすようになり、次々と膨大な注釈書が作られました。

しかし、つねに傑作として賞讃の言葉に囲まれていたかというと、必ずしもそうではなく、時折、『源氏物語』に対する懐疑や批判が出てくることもありました。たとえば『平家物語』の「鹿ヶ谷」の陰謀で流罪になった平康頼の編になる『宝物集』という仏教説話集には、次のような一節があります。

マチカクハ紫式部ガ虚言ヲ以テ源氏物語ヲ造リタル罪ニヨリテ、地獄ニ堕チテ苦患忍ビガタキ故ニ、早ク源氏物語ヲ破リ捨テヽ、一日経ヲ書キテトブラフベシト、人々ノ夢ニ見エタリケルトテ、歌読ミドモ寄リ合ヒテ一日経書キ供養シケルハ、覚エ給フランモノヲ。

これは、『源氏物語』を書いた紫式部が、死後、『源氏物語』という作り事、すなわち根も葉もない狂言綺語を書いたという仏罰により、地獄に堕ちて苦しんでいるということを述べた文章です。紫式部堕地獄説は、謡曲や御伽草子の『源氏供養』に受け継がれていきますが、このような『源氏物語』の見方もあったのです。

また、時代は下って、江戸時代のことになりますが、修学院離宮を造営し、日本古典に親しんで、みずから『伊勢物語』の講釈を行ったり、『源氏物語』に関する書物を遺した後水尾天皇の第四子、十七世紀中期の後光明という天皇は、どういうわけか父後水尾天皇とは正反対で、『源氏』嫌いで有名でした。

同帝（後光明天皇）常々被仰候は、吾国朝廷の衰微いたし候は和歌の発興と源氏物語の行はれ候との二つより起候。中古以上の天子、又は大臣の内にも、天下を治め礼楽に志有之衆に、誰か歌を数寄申人有之候哉。況、源氏は淫乱の書に相極候旨被仰候て、一向歌は不被為読候。源氏、伊勢の類は御目通へも遣不申候。或時、菊亭殿、関東より帰京の節、御冠棚を献上有之其砌、源氏物語の内の絵を蒔絵に仕候御手箱を指添候て被上候処、大に御気色を被損候て、朕が悪む処の源氏の絵を画候事、御満足に不被思召候よしにて、不被留候。菊亭殿一生迷惑に被存候由。

（室鳩巣『鳩巣小説』）

和歌と『源氏物語』を朝廷衰微の元凶と見なして、『源氏物語』や『伊勢物語』には目も向けなかったということです。

しかし、これらの、いわば『源氏物語』否定論においても、その理由として、光源氏と藤壷の密通をやり玉に挙げるものはありません。それは明治になっても同じです。日露戦争に反対して、第一高等学校校長の職を辞した熱烈なキリスト者、内村鑑三は、明治三十三年の「後世への最大遺物」という講演のなかで、次のように『源氏物語』を弾劾しています。

日本人が文学者といふ者の生涯はどう云ふ生涯であるだらうと思うて居るかと云ふに、それは繪艸紙屋へ行つて見ると分る。どう云ふ繪があるかといふと、赤く塗つてある御堂の中に美しい女が机の前に坐つて居て、向ふから月の上つて来るのを筆を翳して眺めて居る。是は何であるかといふと紫式部の源氏の間である。是が日本流の文学者である。然し文学と云ふものはこんなものであるならば、文学は後

『源氏物語』はなぜ帝妃の密通を書くことができたか

世への遺物ではなくして却って後世への害物である。成程源氏物語といふ本は美しい言葉を日本に傳へたものであるかも知れませぬ。併し源氏物語が日本の士気を鼓舞することの為めに何をしたか。何もしないばかりでなく我々を女らしき意気地なしになした。あのやうな文学は我々の中から根こそぎに絶やしたい。

「武士道」の立場からの『源氏物語』批判とでも言えましょうか。しかし、ここでも『源氏物語』は、ただ「女々しさ」という点で批判されているだけで、その要となる光源氏と藤壷の破戒には言及されていません。内村鑑三はどの程度『源氏物語』の内容を知っていたのか、疑わしくもありますが。

しかし、他方『源氏物語』の光源氏・藤壷関係を問題視していた人たちもいました。

それは、昭和になって勃興する皇国史観の源でもあった水戸学に属する学者です。

元禄時代、水戸の徳川光圀に仕え、契沖の指導を受けて光圀の万葉集研究に協力した、安藤為章という国学者がいます。為章は『万葉集』以外にも、『うつほ物語』や『栄華物語』について著述がありますが、その為章に『紫家七論』という『源氏物語』評論があります。その『紫家七論』は、『紫式部日記』などをもとに紫式部の伝記、人柄を論じ、日本文学の傑作としての『源氏物語』の特質を論じた書です。そのなかで、為章は、光源氏と藤壷との密通を、『源氏物語』全体にかかわる重大な事件「一部大事」と位置づけ、次のように述べています。

さるは藤壷に源氏のかよひて冷泉院をうみ給ふは、まことにあるまじきあやまちにして、源氏は姪然の罪おもしといへども、皇胤のまぎれおもはずなるかたにはあらず、桐壷帝の御為には正しく子也、孫也、神武天皇の御血脈也。伊勢の宗廟その祀をうけ給ひ、天下の蒼生その政をいたゞき奉るべし。それすら、猶冷泉院の御後をすて朱雀の正統にかへせるは、いときびしき筆にあらずや。抑一旦人倫のみだれと、永く皇胤のまぎれと、いづれか重く、いづれか軽かるべしや。断案をくだしがたしといへども、臣下の意にていはゞ、源氏の罪をしらざるまねして、皇胤のおもはぬかたならぬをよろこぶべし。式部が真意をしはかるべし。さしも用意ふかき式部が、当時宮中に披露する物語に、心得なくしてかくべしや。此造言諷喩に心づかせ給ひて、いかにもいかにも物のまぎれをあらかじめふせがせ給ふべし。

ここで為章は、光源氏と藤壺の関係、およびその間に子をなしたことを、「まことにあるまじきあやまち」であり、「源氏は婬然の罪おもし」といっています。この点は、さきにご紹介した古来の『源氏物語』批判とは一線を画するところで、『源氏物語』の急所を衝いた批評です。しかし為章はその点を真正面から批判するのではありません。「皇胤のまぎれおもはずなるかたにはあらず」、すなわち光源氏・藤壺密通の結果は「皇胤のまぎれ」を起こしたが、しかしそれは全く突飛なことを書いているわけではない、というのです。その訳は、天皇にはならなかった光源氏の子が即位するという「まぎれ」はそうだけれども、光源氏とて帝の子、密通で生まれた冷泉帝も桐壺帝の孫になるので、他氏の血が混じったのではなく、神武天皇以来の皇室の純血は保たれているからだ、というのです。

これは、為章自身が「一旦人倫のみだれと、永く皇胤のまぎれと、いづれか重く、いづれか軽かるべしや。断案をくだしがたし」といっているように、人倫道徳を血統の純血とすり替えた、あるいは混同した、ちょっとおかしな論理です。そして、皇族ならぬ臣下の分際としては、光源氏の罪には目をつむって(「しらざるまねして」)、皇室の血筋が保たれたことを評価すべし、と言うにいたっては、もうこれは文学論ではありません。そして『源氏物語』はなぜ帝妃の密通を書くことができたかのまぎれ」を書くことによって、現実にそのようなことが起こるのを防ぐための「諷喩」の言だった、というのです。

このような見方をもっと露骨に主張したのが、幕末の国学者橘守部です。『稜威雄誥(いつのおたけび)』という著で次のように述べています。

> 彼の源氏の物語に、冷泉院の帝は実には桐壺の帝の御子にあらず、光源氏の御胤なるよしを書たり。此は深き心のある事にて、吾が朝廷にては歴代さる疑ひはいささか有べきならねど、式部博くもろこしを見わたして、彼国こそさてもあれ、吾が皇統は天つ神の御胤なり。もし後々かやうなる混ひもあらば国家の一大事也とて、光源氏のみそか事に准へて諷諫したるなりければ、是ぞ源氏一部の眼目なる。かかる事の上につきても吾が皇朝の正しく貴きほどを思ふべし。

光源氏と藤壺の物語のようなことは我が国の朝廷では起こるはずもないことであるが、将来こういうことが起これば「国家の一大事」だから、そうならぬようにと紫式部は「物のまぎれ」を「諷諫」の意をこめて書いたのだ、と。

しかし、こうまで言われると、なんだか息苦しくありませんか。『源氏物語』は政治を、人心を、正しく導くための道具だったのかと、反問したくなります。そういう観点から、新しい『源氏物語』の読み方を提唱したのが、国学の大人、本居宣長です。

三

安藤為章や橘守部が唱えたような「一部大事」に対する「諷喩」、「諷諫」的な理解を、宣長は作品の実態からかけ離れた観念的な「儒者ごころ」として非難し、文学は「もののあはれ」をむねとするものである、という独自の論を『源氏物語玉の小櫛』で展開します。

又冷泉院の物のまぎれを、諷諭にとりて、一部の大事也として、そのよしをろんじたるも、なほ儒者ごころにして、ひたすらもろこしのふみどもの例にのみなづみて、物語のこころをしらざるもの也。その論の中に、源氏の君と藤壺中宮との密事を、はじめには、いともやさしきさまにかきなし、終りには、いとおそろしく、有まじきあやまちなりけりと、ことはりたる気象を見よ、といひて、しひて風諭にせむとしたれども、さきに薄雲巻を引ていへる如く、源氏の君、此事を後には、いとおそろしくあるまじかりける事と、おもひしり給ひながら、其後もなほ、朧月夜の君に、忍び忍び逢給ひしは何とかいはむ。もし藤壺の中宮の御事を、いとおそろしきあやまちなりと、ことわれる心ならば、其後にかかる事を、まさに書べしや。もしはたして諷諭ならむには、一たびはいましめながら、又立かへりてすすむるにぞなりぬべき。（中略）かにかくに此御事、わきて諷諭といふべきにもあらず。そもそも此物のまぎれは、古今ならびなき大事にはあれども、物語は物語なれば、さる世の中の大事を、一部の大事として、書くべきにはあらず。これも物語にては、ただ物語の中の一つの事にぞ有ける。然らば此事は、いかなる意にて書るぞといふに、まづ藤つぼの中宮との御事は、上にもいへるごとく、恋の物のあはれのかぎりを、深くきはめつくして見せむため也。

宣長は、『源氏物語』には光源氏の藤壺との密事だけでなく、朱雀帝の寵姫朧月夜尚侍との密事も語られており、もし「諷喩」として書かれたのなら、繰り返しそのような事を書くはずがない、と反論します。そして、それが書かれたのは、「恋の物のあはれのかぎりを、深くきはめつくして見せむ」ためである、と

いう。文学は倫理・道徳のための勧善懲悪の手段ではなく、「物のあはれ」という心の働きを述べて、人を感動させるものである、というわけです。これは、近代的な文学観にも通じる考え方で、今日、この「物のあはれ」論に正面切って異を唱える人はいないと思います。

私も、「物のあはれ」論は文学論としての普遍性を有する理論として評価します。しかし、同時に、『源氏物語』を考える際、それですべてが解決するとは、必ずしも思えないのです。光源氏・藤壺の関係が「恋の物のあはれのかぎりを、深くきはめつくして見せむ」ための設定であるとしても、「物のあはれのかぎり」は、そのような関係にしか見出せないわけではありません。なぜ「王妃との恋」でなければならなかったのか。その答えは、「物のあはれ」論からは出てこないのです。

なぜ、千年前の宮廷で、天皇の子でない者が天皇の位につくというような話が書かれ、何の抵抗もなく受け入れられたのでしょうか。

四

室町時代、第三代足利将軍義詮に献上された『源氏物語』の注釈書『河海抄』は、その冒頭で、光源氏の創造について、

光源氏をも安和の左相に比すといへども、好色の方は、その道の先達なるがゆへに在中将の風をまねびて、五条、二条の后を薄雲女院、朧月夜の尚侍によそへ、或はかたのゝ少将のそしりを思へり。

（巻一・料簡）

と述べています。

光源氏には、更衣腹の一世源氏で大臣にまでなること、また須磨退去にみられるような政界での失脚など、醍醐天皇皇子で左大臣の地位にありながら安和の変で失脚した、源高明の面影があると同時に、女性遍歴の方面では、『伊勢物語』の主人公在原業平に倣って、業平が二条后（藤原高子）や五条后（藤原明子）と艶聞を流したように、光源氏も藤壺や朧月夜尚侍との密事が語られたのだ、というのです。后妃との恋という題材は、『伊勢物語』を踏襲した、という見方です。

これはいかにもその通りで、今日の文学史においても認められています。ただし、「后妃との恋愛」とはいうものの、『源氏物語』と『伊勢物語』との間には、類似と同時に大きな違いもあります。その違いとは、『源氏』の場合は后妃との恋から子が生まれ、さらにその子が即位するという波乱に富んだ展開をするのに対し、『伊勢』の方は恋歌による交渉を述べるだけで、そ

れ以上の展開はない、という点です。

そうなると、いわゆる「一部大事」としての光源氏・藤壺、そして冷泉帝の即位といった内容は、『伊勢物語』の影響を超えた、『源氏物語』の独創といわざるをえず、なぜそれが書けたのかという最初の疑問は依然解消しません。

そこで、かつて、関西大学の清水好子先生（故人）は、『伊勢物語』からは出てこない冷泉帝の問題に触れて、次のように述べています。

首巻桐壺の巻で明瞭に、誤る余地なく、また以後の重要な時点でも一貫して、具体的な歴史的事実を標榜してきたのは、肝腎なところで歴史を超えるためであった。準拠をあれだけやかましく取り用いてきたのは、ここと思うところで準拠ばなれがしたかったからである。そこに作者のしんに独創の刃を振うところが拓けていたのだ。

作者がもっとも大切に育んできた準拠ばなれは不義の子冷泉帝の即位である。

（『源氏物語の文体と方法』）

后妃との恋というところまでは『伊勢物語』の世界であるが、冷泉帝の誕生と即位は、『源氏物語』会心の独創である、という見方です。

ところが、室町時代の『源氏物語』注釈書『花鳥余情』には、その当時、今日の理解からは大きく隔たる『伊勢物語』の読み方があったことが紹介されています。

陽成院の御母二条后也。業平中将かの后にちかづきまいる事、伊勢物かたりにみえたり。よて陽成の御門は中将の子といふ事あり。それもたしかにしるしつたへたるふみなどはなきなり。うす雲の女院の御事、これになぞらへて思ふべし。

『伊勢物語』本文には業平と二条后の恋しか書かれていないけれども、清和天皇の子で二条后腹の陽成天皇は、じつは二条后と業平との間の子だった、という説があった。『源氏物語』の光源氏・藤壺・冷泉帝の物語は、それになぞらえて読むべし、というのです。

「陽成帝は業平の子」というようなことは、もちろん『日本三代実録』のような歴とした書物には載っていません。「確かに記し伝へたる書などはなきなり」です。では『花鳥余情』の著者一条兼良は、そのような情報をどこから得ていたのか。それは、

中世の『伊勢物語』や『古今集』の学問、すなわち「伝授」の世界です。そして、そこでは次のような、私たちの歴史知識からすると、とんでもない事柄が伝えられていたのです。

陽成天皇は、実義には業平の御子なり。二条の后に業平しのびつゝあひたまひてうみたまへる御子なり。

これは、「古今伝授」に用いられた、『玉伝深秘巻』という書の記述です。また、中世の『伊勢物語』注釈書にも、

陽成ハ業平ノ子ニテ坐スト也。是ハ二条后ニ忍テ逢奉シ時、実ハ業平ノ子也ケレ共、御門シロシメサデ有シカバ、太子トシテ位ニツキ給フ也。　（『伊勢物語十巻抄』）

と、同じ様な記事が出てきます。

今日、歴史の分野でも文学史の分野でも、このようなことは事実として認められてはいません。それが史実かどうかは、大いに疑わしいと思います。しかし、史実でなくても風説としてそのような事柄が平安時代にすでにあったとしたら、どうでしょうか。それは『源氏物語』を生み出す強力な源泉になったのではないでしょうか。

五

では、『源氏物語』が書かれた平安時代に、すでに「陽成帝は業平の子」というような風聞が流布していたのでしょうか。残念ながらそれを文献で証明することはできません。

しかし、その可能性はないとはいえません。

私たち戦後の日本人も、何となく天皇は万世一系だと思いこんでいます。しかし「万世一系」という理念は、そんなに古いものではありません。辞書を引いても、古代、中世の文献には用例を見つけることはできません。「万世一系」の確実な用例は、じつは近代になってから、明治の帝国憲法が最初なのです。ということは、『源氏物語』の人々の天皇観は、私たちと同じであったとは限らない、ということを意味します。

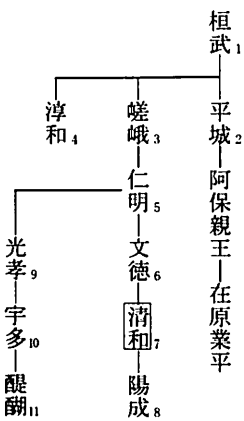
万世一系というと、当代の天皇から血筋をさかのぼっていけば初代の神武天皇に到達するというイメージがありますが、実際はそうなっていない。近代以前は父子直系の皇統ではありませんから、兄弟で皇位を継承したりすると、皇統は分裂し、分裂した両皇統間で軋轢も生じます。ご承知のように、鎌倉時代に持明院・大覚寺両統に別れて皇位を争った両統迭立時代、そ

『源氏物語』はなぜ帝妃の密通を書くことができたか

してその延長上に内乱をもたらした南北朝の争いがありました。

高校で習う程度の日本史の知識ですと、皇室がこういう風に分裂し争うのは、鎌倉時代になってからのようについ思ってしまいがちですが、そうではありません。皇統が分裂し相剋するという事態は平安時代にもありました。そして、その最たる例が『伊勢物語』と深い関係のある時代なのです。

『伊勢物語』の業平の恋の相手は清和天皇の后、二条后藤原高子でした。その清和天皇という帝は、系譜で示すと、次のような位置にある帝です。



（数字は即位の順を示す）

平安京遷都を行った桓武天皇の後、その子、平城・嵯峨・淳和の兄弟が順次皇統を嗣ぎますが、結局は嵯峨天皇の子孫に皇統は継承される。『伊勢物語』の舞台となったのは、その文徳、清和両朝でした。しかし、この皇統は次の陽成帝で断絶します。それも陽成帝あるいはその兄弟に継嗣がなかったからというわけではなく、二十歳になるかならぬかという若さで陽成帝が退位を強制され、皇統は陽成帝の祖父文徳帝の弟光孝へと移ったのです。この皇位継承は異例この上ないもので、王朝交替のない日本では革命に匹敵する大変動だったといえます。陽成の子孫が皇位に返り咲くということがなかったので、後世の両統迭立のような事態は起こらなかったものの、両者の関係が厳しいものであったことは、歴史学者の次のような見解からも、容易に想像できます。

天皇制の歴史の上で、直系の皇統が跡絶えて、傍系に皇統が移行するということは、しばしば見られる現象であった。しかし、直系の天皇が生存しながら、皇統が傍系に移行したことは滅多にない。その希有の例が陽成の退位と光孝の即位であった。（河内祥輔『古代政治史における天皇制の論理』）

光孝・宇多の王統は、文徳の王統の否定の上に成立した王統である。

（木村茂光「光孝朝の成立と承和の変」）

仁明帝以来、天皇家の正統であった文徳系皇統は、陽成退位・光孝即位で一挙に逆転され、以後の光孝皇統下では傍系に転落したのです。そして、先ほども申したように、『伊勢物語』は傍系に転じた文徳皇統を舞台とする物語でした。『伊勢物語』には、「陽成帝は業平の子」という、そのものズバリの内容はもちろん記されていませんが、そもそも業平と二条后との密事をあからさまに記したのは『伊勢物語』だったのです。

六

その『伊勢物語』も、しかし業平・二条后のことを正面切って語っているのではありません。ご承知のように、『伊勢物語』のほとんどの章段は、「男」と「女」の歌のやり取りです。男は「男」であり、女も「女」と記されて、固有名詞を出さないのが原則です。しかし、いくつかの章段には、その末尾に、種明かし的に「女」の素性が語られています。その部分を、「後人注(記)」あるいは「段末注記」と呼んでいますが、次に示すように、「二条后」が登場するのはその部分なのです。

むかしをとこありけり。懸想じける女のもとに、ひじきもといふ物をやるとて、

思ひあらばむぐらのやどにねもしなんひじきものには袖をしつつも

二条のきさきのまだみかどにもつかうまつりたまはで、ただ人におはしましける時のことなり。（『伊勢物語』三段）

この三段以外にも、「後人注記」部分のみを示せば、

二条の后にしのびてまゐりけるを、世の聞えありければ、兄人たちのまもらせ給ひけるとぞ。（同　五段）

これは、二条の后のいとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄人堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるをきゝつけて、とゞめてとりかへし給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、后のたゞにおはしける時とや。（同　六段）

のようなものがあります。この「後人注記」なるものについては、業平自身も関与したであろう『伊勢物語』の原型に、その

後、「歌語り」という文芸享受の場で付加されたのであろうという、妹尾好信氏の説明がおおむね説得的です。

業平没後、原形『伊勢物語』は紀氏の手に渡り、貫之が晩年に大幅に増補して「昔男」の一代記のスタイルを整えるとともに、作中和歌や人物に対する評言なども記して、自己の歌論を表白し、人の心のあり方を問題にした。そして、十世紀後半になってその子時文がさらに章段を増補し、登場人物の実名を明らかにする段末注記を書き添えたと考えられる。それは当時の歌語り流行の気運を背景としたものであった。

（『平安朝歌物語の研究［伊勢物語篇］』第三章『伊勢物語』の形成過程と段末注記）

しかし、歌語りの場で実名開示が求められたとすれば、たとえば二三段の筒井筒の女は誰なのか、二五段の色好みの女は誰なのか。それらに対する答えも要求されたのではないか。しかし、それらについては後人注記はありません。

そういう目で見ると、『伊勢物語』の後人注記は、業平と二条后、およびそれに関連する業平の問題行動を語る章段に集中していることに気付きます。「問題行動」とは、六九段に語られる、業平と伊勢斎宮密会の件です。それだけではありません。そうした事が語られるついでに、「女」の素性だけでなく帝の名も口に出されるのです。

水の尾の御時なるべし。（六五段）

斎宮は水の尾の御時、文徳天皇の御むすめ、惟喬の親王の妹。（六九段）

「水の尾の御時」とは清和天皇のことですが、こういう芳しからぬ事柄に関連して帝の名が出るのは尋常のことではありません。清和天皇直系の皇統下では考えられないことだと思います。しかし、さきほど見たように、皇統を異にする光孝皇統では、清和帝への遠慮はそれほどなかった、というよりも文徳皇統を貶めて自らの正統性の確立に腐心するという情勢だった可能性が少なくありません。実際、陽成帝のことではありませんが、清和帝の親王のなかにじつは業平の子がいたという話すら、『伊勢物語』の後人注記には見出されます。

むかし、氏のなかに親王うまれ給へりけり。御産屋に人びと歌よみけり。御祖父がたなりける翁のよめる。

わが門に千尋ある蔭をうゑつれば夏冬たれかかくれざるべき

これは貞数の親王、時の人、中将の子となむいひける。兄の中納言行平のむすめの腹なり。（七九段）

こうした状況では、業平・二条后の物語（これ自体、事実かどうかわかりませんが）の延長上に、「陽成帝は業平の子」という風聞が発生し流布しても、決しておかしくはありません。さすがにそれは正面切って言われることはなかったのでしょうが、宮廷人士の暗黙知として、脈々と中世の『伊勢物語』や『古今集』注釈・伝授書にまで伝えられてきたのではないか。

『源氏物語』の時代の一条天皇も、光孝皇統の天皇です。その宮廷に仕える『源氏物語』の作者にとって、「陽成帝は業平の子」という風説があれば、それを物語構想のヒントにすることには、何の抵抗もなかったことでしょう。

『源氏物語』薄雲巻は、藤壺の死を語る巻です。そこで藤壺の死後、自らの実父が源氏であることを知らされて驚き悩み、そのような先蹤をめぐって史書を渉猟する冷泉帝の姿が、次のように語られています。

さまざまの書どもを御覧ずるに、もろこしにはあらはれても忍びても乱りがはしき事いとおほかりけり。日の本にはさらに御覧じうるところなし。たとひあらむにても、かやうに忍びたらむ事をば、いかでか伝へ知るやうのあらむとする。

この前半は、帝の子でない者が帝位につくといった人倫の乱れは、中国には多いが日本には見出せないといっています。けれども後半では、かりにそのような事があったとしても、それは史書に記載されることもなく、後世には伝わらないであろう、という。これは読みようによっては思わせぶりな文言で、その背後に「陽成天皇は業平の子」という風説の匂いを嗅ぐことも不可能ではありません。また蛍巻の「物語論」といわれる、『源氏物語』作者の物語観が窺われる個所では、有名な、

日本紀などはただかたそばぞかし、これらにこそ道々しくくはしきことはあらめ。

『源氏物語』はなぜ帝妃の密通を書くことができたか

という言葉が発せられています。

この言葉から浮かび上がってくるのは、「史書には記されない事実もある、物語はそれを書いているのだ」という意識です。そして、これはたんなる一般論ではなく、「陽成帝は業平の子」という、平安時代宮廷社会の暗黙知を物語化した作者にしてはじめて言えた言葉ではないかと思われてなりません。史書に記録されるような表向きの歴史ではない、しかし荒唐無稽な作り話でもないのだ――このような認識に支えられて、『源氏物語』の「帝妃の密通」の物語は書かれたのだと思います。

（いまにし　ゆういちろう・九州大学教授）